



❁ いつも誰かに助けてもらえる人 ❁

振り返ってみれば、重要な局面ではいつも誰かに助けてもらっていたことをふと思い出しました。やっぱり人って1人では生きていけないもので、今までもそう、きっとこれからも死ぬまでずっとそうだろうと思います。「もうダメかも」という場面になると、不思議なことにも誰か助けてくれる人が現れるのです。

思い起こしてみれば、私が誰かに助けてもらったエピソードは、中学時代の文化祭実行委員での大成功や高校時代の全国大会を懸けた一戦、大学時代のTOEIC試験等、失敗していればその後の人生を変えていたかもしれないものばかり。例えば、大学3年の夏にTOEIC留年リーチで迎えた試験の日。ここで進級要件スコアをクリアできなければ研究室への配属もなくなり、4年での卒業は「絶対ムリ」とわかっていた試験だったのですが、なぜか私は寝過ごしてしまいます。すると、この日まで私に熱心に英語を教えてくれていたサークルの同級生が何度も電話をかけてきてくれて、なんとか試験に間に合ったのです。おかげで、TOEIC留年を免れ、晴れて私は4年で大学を卒業しました。今でもその友には感謝です。

ちょうど同じ頃、私がこの業界にすすむきっかけとなる出来事が起こります。平成21年7月の中国・九州北部豪雨です。私がこれまでに経験したことのない浸水被害で、数日間にわたって断水する事態となり、下宿先からほど近い湯田温泉の無料開放を利用したりもしました。実家に向かう国道262号線は土石流によって1ヶ月以上通行止めとなり、再開直後はまるで別世界。なかでも、防府市の特別養護老人ホーム裏で大規模な土石流が発生し、施設の1階部分が土砂に埋まって、多くの入所者の尊い命が失われたことは、私の就職活動に大きな影響を与え、「土砂災害」や「逃げ遅れゼロ」、「防災」をキーワードに就職先を探すきっかけとなりました。

そして、東日本大震災に見舞われた平成23年の4月に入社してから11年間で、多くの防災・減災関連事業に携わり、ときには災害現場やそれに関わる人々を目の当たりにしてきた今も、自然災害とそれらから人命を守る難しさを感じます。平成28年8月の豪雨により岩手県岩泉町でグループホームの入所者9人が犠牲になったことを受けて、浸水想定区域や土砂災害警戒区域の要配慮者利用施設に避難確保計画と訓練が義務づけられました。しかし、令和2年7月に発生した熊本県球磨村の豪雨災害では避難確保計画を作成し、避難訓練も行われていた特別養護老人ホームでもまた14人もの尊い命が失われ、要配慮者利用施設における避難の実効性確保という課題が新

たに認識されました。

このように、私たちはこれから先も数多くの災害から教訓を学び、想定外の災害と向き合っていくしかないのだろうと思います。今でもこの仕事に前向きに取り組んでいるのは、私も誰かの助けになりたいと感じた大学3年の夏があったからだと思うと、この先もあの頃の気持ちを大切に、忘れずにいたいものです。

ここで、職場環境について振り返ってみると、私の周りには入社当時から女性技術者が多かったようです(写真-1)。同期の男女比も同じで、女性を増やす取り組みもあったのですが、年々増加傾向。コロナ禍以前は頻繁に女子会を開いては趣味や仕事の話をしながら楽しいときを過ごしていました(写真-2)。そのためか、職場で性別を支障に感じたり、建設業＝男社会と思うようなことはありませんでした。一方で、入社したばかりの頃は、女性にフォーカスした勉強会等も行われていましたが、近年はそのような機会もほとんどなくなり、増えているのは男女問わず仕事と家庭を両立している技術者で、若手にとってもロールモデルとなる女性技術者が多数在籍していることは、心強いのではないのでしょうか。

おわりに、私が「つらい」「辞めたい」とネガティブなとき、親身になってフォローしてくれる先輩や後輩、仕事に対する不満を受け止めてくれて、私の考えを尊重してくれる上司、いつも助けてくれている人たちへ感謝を伝えたいです。社会人12年目になった今も心がけているのは、わからないことを素直に相談すること。これまで本当にたくさんの人を頼ってきました。東京→関西→出向(STC)と、所属や立場は変わっても、困ったとき、いつも誰かに助けられてきたからこそ、今日もここで働いているのだらうと思います。私も尊敬できる方々に少しでも近づけるよう、周りを見ながら仕事に取り組み、困っている人や助けてと言えない人にも手を差し伸べられるような人になりたいです。

(小林 実和・国際航業株式会社
国土保全部 総合防災グループ)



写真-1 平鍋地区での社内巡検 (H24.5 撮影)



写真-2 女子会 (H28 撮影)